

『ワークブックで実践する脳損傷リハビリテーション』

Rachel Winson, Barbara A. Wilson, Andrew Bateman 編
 廣實真弓 監訳

エビデンスに基づく高次脳機能障害の
 リハビリテーション治療の必携の手引書

本書のすがすがしい読了感は、高次脳機能障害のリハビリテーション治療に従事する専門職にとって、「目から鱗が落ちる」ような、思いもよらなかった発想や考え方、治療手技への納得や充足感であると思う。全編に流れる「神経心理学的リハビリテーション」の思想は、全人的アプローチとも表現されるもので、著者の一人、Barbara A. Wilson 博士が薫陶を受けた George Prigatano 博士、Yehuda Ben-Yishay 博士等、世界をリードしてこられた先生方の認知リハビリテーション治療の考え方の延長線上にあるものである。

本書は、英国における高次脳機能障害に対するリハビリテーション治療のメッカとも言える、B.A. Wilson 博士創設の The Oliver Zangwill Centre が現在取り組んでいる治療プログラムが詳述されている。すなわち、注意、記憶、遂行機能、コミュニケーション、疲労、気分、アイデンティティの7項目に分けて、理論的背景、神経解剖学、評価方法とともに豊富なエビデンスを引用し、リハビリテーション治療の技術が丁寧に記述されている。その中には、「クライアントと検討する」という項目が盛り込まれており、「リハビリテーションは、患者が、専門職と家族と相互的に関わりながら身体的、心理的、社会的に最良の状態に導く、その過程である」とする B.A. Wilson 博士の主張が流れている。そのため、本書のもう一つの特徴ともいえる患者、家族に配布できるハンドアウトが各章に豊富に用意され、患者はそれをもとに、時に書き込み

ながら、自己の高次脳機能障害の内容を理解し対応方法を習得することができる。読者はこのハンドアウトをダウンロードし、日々の臨床に使用することができる。また各章にはケーススタディが盛り

込まれ、われわれに実臨床でどのように問題点を抽出し、治療戦略を練っていけばよいのかを教えている。さらに上記7項目の他に、「脳解剖と損傷メカニズム入門」の章では、神経機能解剖学が平易に説明され、学習の強化や患者への病態理解のためのポートフォリオの作成等、有益な情報が盛り込まれている。なお本章の執筆者である Andrew Bateman 博士は、筆者が The Oliver Zangwill Centre を視察した折に、2020年に行われる日本高次脳機能障害学会で講演をされる予定と話しておられた。

本書には、「感情」を中心として患者の全体像をとらえる formulation という考え方、脳損傷によって変容するアイデンティティにどう支援者が対峙するのかを示す Y 字モデル等、The Oliver Zangwill Centre の長年の経験と世界のエビデンスが満載されている。高次脳機能障害のある方とその家族を支援する専門職の座右の書としていただきたい一冊である。

渡邊 修

(東京慈恵会医科大学附属第三病院)
 リハビリテーション科



B5 判, 296 頁
 4,800 円+税
 刊行: 2018 年 10 月
 医歯薬出版株式会社